

## 雅歌5-8章「継続する愛」

### 1A 愛への不応答 5

1B 自分の都合 2-8

2B 愛する方の優越性 9-16

### 2A 清められた愛 6

1B 光輝く美しさ 1-10

2B 高貴な人の車 11-13

### 3A 豊かな交わり 7

1B 絶賛と高揚 1-9

2B 妻からの率先 10-13

### 4A 家族にあるような親密さ 8

1B 決して離れない愛 1-7

2B 兄たちへのお返し 8-14

## 本文

雅歌5章から学びます。私たちは前回、ソロモンが愛した一人のシュラムの女と結婚して、初めての夜を過ごしたところまでを読みました。そこにおいて、私たちは、田舎にいる肌が黒い娘を、「女の中で最も美しい人よ」と呼び、彼女が王の妻となることによってもたらされるあらゆる不安を取り除きました。たくさんいる女の中での愛ではなく、彼女こそが自分の愛する者であるという、特別な愛を注ぎました。それゆえ、彼女はソロモンに全てを明け渡すことができました。この明け渡しこそが、真実な交わりの初めです。私たちが、イエス様によって愛されているという時に、イエス様がこれほどまでに愛してくださったのだ、という愛の保証、安心感を持っているかどうか、これが私たちの信仰生活の全てを左右します。

### 1A 愛への不応答 5

そして5章からは、この夫婦愛が円熟していく姿を見ていくことができます。その中で、愛のすれ違いが起こります。結婚する前での心の準備というのも大事ですが、結婚してからその初めの愛を保っていることができるのか、イエス様がエペソの教会に言われた「初めの愛」からいかに、離れないでいるのかが、問われていきます。2節からです。

#### 1B 自分の都合 2-8

5:2 私は眠っていましたが、心はさめていました。戸をたたいている愛する方の声。「わが妹、わが愛する者よ。戸をあけておくれ。私の鳩よ。汚れのないものよ。私の頭は露にぬれ、髪の毛も夜のしづくでぬれている。」5:3 私は着物を脱いでしまった。どうしてまた、着られましょう。足も洗ってしまった。どうしてまた、よごせましょう。5:4 私の愛する方が戸の穴から手を差し入れました。

私の心は、あの方のために立ち騒ぎました。5:5 私は起きて、私の愛する方のために戸をあけました。私の手から没薬が、私の指から没薬の液が、かんぬきの取っ手の上にしたたりました。

彼女は夢の中で、この出来事を見えています。3章においても、彼女が夢を見たのを覚えていますか？夢の中で、彼がいなくなったのを知って、それで捜していたら彼が見つかったということです。彼女が結婚を間近に控えて、この結婚が解消されてしまうかもしれないという僅かな不安が、夢の中に出てきました。ここでは、そうではありません。既に結婚しているのですが、シュラムの女はソロモンが共に寝たいと思っているのに、彼女がそれを拒んだのです。

その理由が、「私は着物を脱いでしまった。どうしてまた、着られましょう。足も洗ってしまった。どうしてまた、よごせましょう。」というものです。これは、あまりにもお粗末な理由です。云わば、「面倒くさい」という類に入るでしょう。こうした都合で夫が願っているのにそれに応えないという過ちを、シュラムの女は犯していたのです。夫婦関係において、それをしてはいけないことをパウロは指導しています。「1コリント 7:3-5 夫は自分の妻に対して義務を果たし、同様に妻も自分の夫に対して義務を果たしなさい。妻は自分のからだに関する権利を持ってはおらず、それは夫のものです。同様に夫も自分のからだについての権利を持ってはおらず、それは妻のものです。互いの権利を奪い取ってははいけません。ただし、祈りに専心するために、合意の上でしばらく離れていて、また再びいっしょになるというのならかまいません。あなたがたが自制力を欠くとき、サタンの誘惑にかからないためです。」

このことは、キリストの愛についても同じことが言えます。キリストがこの上ない愛をもって愛しておられます。しかし、私たちが日々の営みで、それが忙しくなってその愛に 응답していないことがあるでしょう。主との時間を過ごすのではなく、それ以外の事柄で忙しくなって、その親密な交わりがなくなってしまいます。しかし、そのことによって失うものは大きいです。

5:6 私が、愛する方のために戸をあけると、愛する方は、背を向けて去って行きました。あの方のことばで、私は気を失いました。私が捜しても、あの方は見あたりませんでした。私が呼んでも、答えはありませんでした。5:7 町を行き巡る夜回りたちが私を見つけました。彼らは私を打ち、傷つけました。城壁を守る者たちも、私のかぶり物をはぎ取りました。5:8 エルサレムの娘たち。誓ってください。あなたがたが私の愛する方を見つけたら、あの方に何と行ってくださるでしょう。私が愛に病んでいる、と行ってください。

結婚直前の夢では、夜回りにソロモンを探してもらいましたが、ここでは打ち叩かれています。おそらく、自分のしたことについて深く罪意識を感じているのでしょう。しかし、このことがソロモンへの愛を掘り起こすきっかけとなりました。エルサレムの娘たちに「私が愛に病んでいる、と行ってください。」と頼んでいます。自分は一時的な拒否だったつもりなのが、そうではなく、愛によって守られていること、ソロモンと一緒にいること、このことも共に失われてしまったことに気づいたので

す。イエス様への私たちの愛、また互いの愛も同じですね。一時的なことでそれを拒むと、自分がその交わりの中から外れていることに気づきます。それで戻りたいと願います。

## 2B 愛する方の優越性 9-16

5:9 女のなかで最も美しい人よ。あなたの愛する方は、ほかの愛人より何がすぐれているのですか。あなたがそのように私たちに切に願うとは。あなたの愛する方は、ほかの愛人より何がすぐれているのですか。

とても大事な質問です。エルサレムの女たちは、「愛に病んでいる」と言っているけれども、彼女がソロモンへの愛を取り戻すためには、「何がすぐれているのですか。」という質問に答えなければいけないと思いました。ただ、今、自分が喪失感の中にいるから助けて、ではなく、ソロモンこそが自分の愛する方であることをはっきりさせなければいけません。それで彼女は、言葉をもって回答します。これは大事です、私たちが愛について、また自分が何を信じて、何を大事にしているのか、それを聞かれた時にはっきりさせることができるのは、自分の愛が真正だ、本物だということを示しています。

5:10 私の愛する方は、輝いて、赤く、万人よりすぐれ、5:11 その頭は純金です。髪の毛はなつめやしの枝で、烏のように黒く、5:12 その目は、乳で洗われ、池のほとりで休み、水の流れのほとりにいる鳩のようです。5:13 その頬は、良いかおりを放つ香料の花壇のよう。くちびるは没薬の液をしたたらせるゆりの花。5:14 その腕は、タルシシュの宝石をはめ込んだ金の棒。からだは、サファイヤでおおった象牙の細工。5:15 その足は、純金の台座に据えられた大理石の柱。その姿はレバノンのよう。杉のようにすばらしい。5:16 そのことばは甘いぶどう酒。あの方のすべてが美しい。エルサレムの娘たち。これが私の愛する方、これが私の連れ合いです。

彼の頭のとっぺんから足のつま先まで、彼が優れていることをはっきりと語っています。頭の純金というのは、王冠のことでしょう。おそらくこの姿は、王服を身に付けているのではないかと思われる。腕が金の棒、足が大理石の柱というのは、その肉体ではなく、王の栄光を示している服を身に付けているのではないかと思われる。このように、ソロモンが他の誰にもまして、すぐれている方であり、その栄光をまじまじと見て、その方を愛していると告白しています。彼女は、栄光の王と交わっている、栄光の王と愛し合っているということを忘れてしまったのでしょうか、その恵みを安価な恵みに変えてしまっていました。それを反省し、彼への愛を新たにしました。これは、イエス様との関係に大いに当てはめることができます。午前中に黙示録 1 章 13-15 節を読みましたが、イエス様の栄光の姿は、まさにこの輝きを持っておりました。

そこで大事なものは、主が他のものよりも優れているということです。イエス様への愛を冷やしてしまった人々の中に、ユダヤ人信者たちがいます。ヘブル人への手紙を読むと、初めは主への確信を強く持っており、兄弟への愛をしっかりと持っていたのに、迫害が強くなって、ユダヤ人社会の

中に埋没しようとしていました。そこで著者は警告を与えました。心をかたくなにして、神から離れることのないようにと警告しました。そこで彼が行ったのは、イエス様が優れているということです。イエス様は、光輝く御使いより優れている、神の御子であることを話しました。そして、神の家に仕えたモーセよりも優れており、神の家を治める方ご本人であることを教えました。そして、アロンの祭司職よりも優れた方、メルキゼデクの位に着いておられる永遠の方であることを教えています。それから、古い契約よりも新しい契約が優れていることを話し、こうやってイエス様が、彼らが思っている良いものよりも、優れていることを示したのです。私たちは、心の中でこの栄光、この優越性を他のと変わらないものにしてしまいます。そうして、初めの愛から離れていってしまうのです。

## **2A 清められた愛 6**

### **1B 光輝く美しさ 1-10**

6:1 女のなかで最も美しい人よ。あなたの愛する方は、どこへ行かれたのでしょうか。あなたの愛する方は、どこへ向かわれたのでしょうか。私たちも、あなたといっしょに捜しましょう。6:2 私の愛する方は、自分の庭、香料の花壇へ下って行かれました。庭の中で群れを飼い、ゆりの花を集めるために。6:3 私は、私の愛する方のもの。私の愛する方は私のもの。あの方はゆりの花の間で群れを飼っています。

ソロモンは、遠くに行っていませんでした。「自分の庭」に行っていると言っています。ソロモンが自分のところに再び現れたのです。エルサレムの娘たちに探してもらわなくても、彼はいつも彼女と一緒に会うところにやって来ていた、ということです。群れを飼うというのは、彼は王ですから、民を飼う羊飼いとして彼女は描いています。しかし、ゆりの花の間で飼っています。先ほど、唇が没薬の液をしたたらせるゆりの花とありましたので、彼の言葉がこのように甘いことを示しています。彼女はソロモンが戻ってきて、ほっとしています。

そして、これで夢が終わったのでしょうか。次にソロモン自身が、彼女をほめたたえます。6:4 わが愛する者よ。あなたはティルツァのように美しく、エルサレムのように愛らしい。だが、旗を掲げた軍勢のように恐ろしい。6:5 あなたの目を私からそらしておくれ。それが私をひきつける。あなたの髪は、ギルアデから降りて来るやぎの群れのように、6:6 あなたの歯は、洗い場から上って来た雌羊の群れのように。それはみな、ふたごを産み、ふたごを産まないものは一頭もない。6:7 あなたの頬は、顔おおいのうしろにあって、ざくろの片割れのように。

ソロモンは彼女を、結婚した時のようにほめたたえています。髪、歯、頬を見えています。けれども、結婚式のときと違うのは、「旗を掲げた軍勢のように恐ろしい。」というものです。さらに、「ティルツァ」は、後に北イスラエルの国でサマリヤの前に首都になるところで、それからエルサレムとなっています。これは預言的でさえあり、全イスラエルの美しさの栄光で輝いている、ということです。つまり彼女は、あまりにも輝き眩しくて恐ろしいほどだという、一種の畏敬を持っています。王たるソロモンが、女王としての美しさと輝きに圧倒されているのです。彼女が、田舎娘だったことを思い出

してください。彼女は、そこから妻として迎え入れられました。そして彼女は立派に、王妃としてその輝きを持っていました。

6:8 王妃は六十人、そばめは八十人、おとめたちは数知れない。6:9 汚れのないもの、私の鳩はただひとり。彼女は、その母のひとり子、彼女を産んだ者の愛する子。娘たちは彼女を見て、幸いだと言い、王妃たち、そばめたちも彼女をほめた。6:10 「暁の光のように見おろしている、月のように美しい、太陽のように明るい、旗を掲げた軍勢のように恐ろしいもの。それはだれか。」

ソロモンには、三百人の王妃、そばめが七百人いたことが、第一列王記にあります。けれども、これはその前ということです。まだ王妃が六十人、そばめが七十人しかいなかった頃なので、以前、雅歌の書かれた時期について質問を受けましたが、彼の治世の初めのほうでしょう。

そして彼女と、その女たちを比べていますが、彼女はその中で「汚れのないもの、私の鳩はただひとり」であります。さらに、彼女は実家の中でも特別な娘、女の子でした。「その母のひとり子、彼女を産んだ者の愛する子」と言っています。後で彼女は、ソロモンを母の家の所まで連れて行きますが、彼女にとって母は特別な存在だったようです。そしてすごいのは、午前に話しましたが、王妃やそばめたちが、彼女を妬むことなく、むしろほめたのです。彼女が単なる性の対象としての美しさでないことは確かです。神の恵みによって支えられた気品、そこにある美しさです。

そして暁の光、月のような美しさ、そして太陽のような明るさ、それから軍勢のような恐ろしさがあります。夜明けに近いことを知っている存在、主の栄光を映し出している存在、そして神によって完全にみなされている存在、そして敵にとっては恐れられる存在です。私たち教会が、ここまで栄光に輝く美しさを持っているということ、この愛の安心感に基づく自負を持つべきですね。

## 2B 高貴な人の車 11-13

6:11 私はくるみの木の庭へ下って行きました。谷の新緑を見るために。ぶどうの木が芽を出したか、ざくろの花が咲いたかを見るために。6:12 私自身が知らないうちに、私は民の高貴な人の車に乗せられていました。6:13 帰れ。帰れ。シュラムの女よ。帰れ。帰れ。私たちはあなたを見たい。どうしてあなたがたはシュラムの女を見るのです。二つの陣営の舞のように。

シュラムの女もソロモンも、自分の私的な領域をずっと「庭」と呼んでいます。それが私的な場所である時もあれば、自分自身の体を指す時もあります。ここでは、ソロモンとの間に芽が出てきたか、花が出てきたかと迷っている場面です。つまり、自分が拒否してしまったために、失われたその愛が、再び芽を出して回復したかしら、と思えばぐねている部分です。そうですね、実が結ばれるのは自動的ではありません。それは育てなければいけないものです。愛の営みは、シュラムの女とソロモンが示した、相手に対するものすごい高い評価、その高みに存在します。



これは私たちとキリストとの関係でも同じです。この方を私たちが、この方としてあがめているでしょうか？確かにこの方が生きて働いておられることを、日々の生活の中で認めているでしょうか？それとも、退屈な営みの中に一部としてしまっていないですか？そこからの回復が必要です。そして主ご自身が私たちをご自分の恵みの中で引き上げてくださいます。主が恵みによって私たちを引き上げ、私たちがこの方を主として生きる時に、そこに実が結ばれます。芽が出て、それが育って実を結び、そして神ご自身がその実を楽しみたいと願っておられます。

そして、女がその庭にいた時に、いきなり車がやってきました。それは高貴な人の車です。つまり彼女が高い位の人として迎え入れられることです。何をやっているのだ、早く戻ってきなさいというソロモンが出した車です。そして、シュラムの女を娘たちが迎え入れます。「二つの陣営の舞」とありますが、これはマハナイムの舞です。ヤコブがエサウと会う時に、御使いの軍勢が付いてきていましたが、ヤコブのその不安な心とは裏腹に、神はエサウから彼を守ってくださいました。つまり、ソロモンとの愛の営みは守られるということでしょう。

### **3A 豊かな交わり 7**

#### **1B 絶賛と高揚 1-9**

7:1 高貴な人の娘よ。サンダルの中のあなたの足はなんと美しいことよ。あなたの丸みを帯びたももは、名人の手で作られた飾りのようだ。7:2 あなたのほぞは、混ぜ合わせたぶどう酒の尽きることのない丸い杯。あなたの腹は、ゆりの花で囲まれた小麦の山。7:3 あなたの二つの乳房は、ふたごのかもしか、二頭の子鹿。7:4 あなたの首は、象牙のやぐらのようだ。あなたの目は、バテ・ラビムの門のほとり、ヘシュボンの池。あなたの鼻は、ダマスコのほうを見張っているレバノンのやぐらのようだ。7:5 あなたの頭はカルメル山のようにそびえ、あなたの乱れた髪は紫色。王はそのふさふさした髪のとりにこになった。

ソロモンは今、下から上へと彼女をじっくりと見ています。以前は結婚衣装を付けていた彼女であり、6章においては王妃としての衣装を身に付けていたシュラムの女ですが、ここでは裸になっている彼女です。

7:6 ああ、慰めに満ちた愛よ。あなたはなんと美しく、快いことよ。7:7 あなたの背たけはなつめやしの木のように、あなたの乳房はぶどうのふさのようだ。7:8 私は言った。「なつめやしの木に登り、その枝をつかみたい。あなたの乳房はぶどうのふさのように、あなたの息はりんごのかおりのようであれ。7:9 あなたのこぼれは、良いぶどう酒のようだ。私の愛に対して、なめらかに流れる。眠っている者のくちびるを流れる。」

彼女の愛を楽しんでいるソロモンの姿です。繰り返しますが、ソロモンの愛は単なる肉欲ではありません。彼が彼女を、ものすごい高いところまで持っていき、その恵みをもって愛しているからこそ、彼は彼女の愛を楽しむことができます。「あなたのここがだめだ、あそこがだめだ。」と言

わないのです。それは、仕事においては公平な評価かもしれませんが、愛と恵みにおいてはお粗末な行為です。私たちは決して、このように愛と恵みによって人を見ることができません。見ているとしても、それは相手の悪い部分から目を閉じてみているようなものです。そうではありません、イエス様こそが、人の罪を知りつつそれでも愛された方です。私たちは、イエス様がおられるところだから、そこに欠けたものを見ないことができます。愛によって罪を覆うことができます。

## 2B 妻からの率先 10-13

7:10 私は、私の愛する方のもの。あの方は私を恋い慕う。7:11 さあ、私の愛する方よ。野に出て行って、ヘナ樹の花の中で夜を過ごしましょう。7:12 私たちは朝早くからぶどう畑に行き、ぶどうの木が芽を出したか、花が咲いたか、ざくろの花が咲いたかどうかを見て、そこで私の愛をあなたにささげましょう。7:13 恋なすびは、かおりを放ち、私たちの門のそばには、新しいのも、古いのも、すべて、最上の物があります。私の愛する方よ。これはあなたのためにたくわえたものです。

これまでは、ソロモンが率先して彼女を親密な結びつきの中に導きました。ここでは、彼女の方が率先して彼を導いています。「野に出て行って、ヘナ樹の花の中で」と言っていますが、これは8章の続きを見ますと、彼女の実家、その田舎にソロモンを連れて行っています。つまり、王宮における二人の愛の営みだけでなく、そのような富や位があるところだけでなく、自分にとってとても大切な自分の家族のところに戻って、それで愛を楽しみましょうと誘っています。そのようにして、彼女は愛の確認をさらにできます。最も大切にしている家族、そのところにおいても、この愛がしっかりと結び合わされているなら、この関係は本当に確かであるとする事ができるのです。

ですから彼女は、「木が芽を出したか、花が咲いたか、ざくろの花が咲いたかどうか」と実が結ばれることを確かめているのです。私たちも、イエス様との関係で、本当に実を結ばせているのかどうか、確かめる時が必要でしょう。表面的な活動によって、確かめることはできません。イエス様は、「実によって彼らを見分けることができます。(マタイ 7:16)」と言われました。どんなに、「主よ、主よ」と叫んでも、主の御名によって預言して、悪霊を追い出していたとしても、不法を行なっているのであれば、イエス様から退けられます。

表面的な行ないによって、自分たちを証明しよう、自分が認められようとするのですが、それは本物の実ではありません。カインとアベルを思い出してください、カインは自分の作物を主に捧げましたが、拒まれました。それは自分が主のために捧げたからです。しかしアベルは、主が彼に示したとおりに捧げたので、受け入れられたのです。そしてパリサイ人の祈りを思い出してください、「私はこれこれのことをしました。」と言って、自分が何かしていることを主の前で認められる、存在価値としていたのです。けれどもその祈りは主は退けられて、むしろ自分が主の基準に達していないことを悔いて、赦しを請うている取税人のほうを、主は義と認められました。つまり、どういうことか？主が求めておられる実とは、もっぱらイエス様によって自分が愛されているという、確信から来ている行ないであります。罪赦された女が、涙を流して、イエス様の御足を拭いた、その愛を動

機とした献身です。そして、自分が何かをするのではなく、御霊が命じられることを聞き、それに従うことが、まことの実を結ばせます。

#### **4A 家族にあるような親密さ 8**

##### **1B 決して離れない愛 1-7**

8:1 ああ、もし、あなたが私の母の乳房を吸った私の兄弟のようであったなら、私が外であなたに出会い、あなたに口づけしても、だれも私をさげすまないでしょうに。8:2 私はあなたを導き、私を育てた私の母の家にお連れして、香料を混ぜたぶどう酒、ざくろの果汁をあなたに飲ませてあげましょう。

当時の中東の社会では、今でもそうでしょうが、最も親密に交わることのできる人は、家族の中です。イスラムの社会では、女性は覆いを付けて外に出なければいけません、家の中だけはそれを取ることができます。外に行くと、異性と一緒にいることができるのは唯一、血のつながった兄や弟、また父親だけだったのです。ですから、おそらく父を早くして失ったこの家で、異性で公に親しくできるのは、兄たちだけだったのです。そのように、私たちが深い、親密な関係になればよいのに、と彼女は行っています。そして彼女にとって、母は特別な存在であったようです。母こそが、自分を幼い時から親密に接してくれた人です。実にお腹を痛めて産んだところから、母は彼女に最も近い人だったのです。そこにソロモンを招くということは、ソロモンに対して一段と親密なところに導いていることになります。

8:3 ああ、あの方の左の腕が私の頭の下にあり、右の手が私を抱いてくださるとよいのに。8:4 エルサレムの娘たち。私はあなたがたに誓っていただきます。揺り起こしたり、かき立てたりしないでください。愛が目ざめたいと思うときまでは。

改めて、彼女は昔に、求愛していたころに語った言いまわしを、エルサレムの娘たちに言わせています。これは、彼女にとっては大きな段階だったようです。ソロモンとの愛の営みの中で、自分の家族のところでそれを行なうということは、これまでにない強い結びつきを示すものです。どんなことがあっても、その結びつきは壊されません、完全にくっついたものです。

そこで私たちは、どこまでイエス様との結びつきを強くしているか、いつも試されます。イエス様は、肉の家族がご自身のところに近づいてきた時に語られました。「マルコ 3:31-35 さて、イエスの母と兄弟たちが来て、外に立っていて、人をやり、イエスを呼ばせた。大ぜいの人がイエスを囲んですわっていたが、「ご覧なさい。あなたのおかあさんと兄弟たちが、外であなたをたずねています。」と言った。すると、イエスは彼らに答えて言われた。「わたしの母とはだれのことですか。また、兄弟たちとはだれのことですか。」そして、自分の回りにすわっている人たちを見回して言われた。「ご覧なさい。わたしの母、わたしの兄弟たちです。神のみこころを行なう人はだれでも、わたしの兄弟、姉妹、また母なのです。」これは大きな発言です。イエス様は決して、ワーカホリック、詰まり



仕事に没頭して肉の家族を忘れていたのではありません。むしろ、イエス様と、ご自分の言葉を言う者たちとの結びつきが、あまりにも強いので、肉の家族の結びつきを超えたということです。

8:5 自分の愛する者に寄りかかって、荒野から上って来るひとはだれでしょう。私はりんごの木の下であなたの目をさまさせた。そこはあなたの母があなたのために産みの苦しみをした所。そこはあなたを産んだ者が産みの苦しみをした所。

初めに話しているのが、シュラムの女です。かつて、エルサレムの娘たちが、「3:6 没薬や乳香、貿易商人のあらゆる香料の粉末をくゆらして、煙の柱のように荒野から上って来るひとはだれ。」と言いました。その荒野とは、ユダの荒野のことでしょう。花嫁として引き取られた時、そこからエルサレムに上ってきたのです。次にシュラムの女は自分で、そこから上ってくる人は誰でしょう、と彼女は再び同じ質問をしています。つまり、自分がかつてエルサレムに上ったが、今はソロモンがガリラヤのシュネムに下ってきた、ということです。

そしてソロモンが答えます。「私はりんごの木の下であなたの目をさまさせた。」と言っていますが、それは彼女がまだ結婚していない時に、宴の場にいたソロモンを見て、「林の中のりんごの木のように。私はその陰にすわりたいと切に望みました。その実は私の口に甘いのです。(2:3)」と言いました。ソロモンは、まだ田舎にいた彼女がソロモンを慕ったことを思い出し、今度は自分がその愛に応答して、彼女が最も近い存在であった母親の家のところまで来たのです。そしてそこで愛の営みをします。

8:6 私を封印のようにあなたの心臓の上に、封印のようにあなたの腕につけてください。愛は死のように強く、ねたみはよみのように激しいからです。その炎は火の炎、すさまじい炎です。8:7 大水もその愛を消すことができません。洪水も押し流すことができません。もし、人が愛を得ようとして、自分の財産をことごとく与えても、ただのさげすみしか得られません。

母と同じような親密な結びつきで、今、彼女がソロモンと一つになれています。だから、それは封印のようなものであり、そして火の炎のようにねたみがあるものであり、どんなことがあってもそれを消すことができません。財産でさえ、取って替えることはできません。これこそが、イエス様が語られていた結婚の定義です。「それゆえ、人はその父と母を離れて、妻に結びついて、ふたりの者が一心同体になるのです。それで、もはやふたりではなく、ひとりなのです。こういうわけで、人は、神が結び合わせたものを引き離してはなりません。(マルコ 19:7-9)」

これだけの、引き離せない関係を結婚に対して主が語られるのは、それだけ真剣な関係を主がキリスト者に対して抱いておられるからです。エペソ書において、私たちがキリストにあって、天にあるすべての霊的祝福をもって、私たちが父なる神が祝福してくださったとあり、その後でいろいろな祝福を列挙して、最後にこう言いました。「エペソ 1:13 またあなたがたも、キリストにあって、真

理のことは、すなわちあなたがたの救いの福音を聞き、またそれを信じたことによって、約束の聖霊をもって証印を押されました。」証印をおされたのです。したがって、私たちを神はキリストから引き離すことはなさらないのです。それだけの愛をもって結びつけてくださいました。そこで、私たちがそこまでの愛をもって、イエス様を妬むほどに愛しておられるでしょうか？それよりも、他の人たちとの関係、自分の都合や利益を優先させていることはないでしょうか？

## 2B 兄たちへのお返し 8-14

8:8 私たちの妹は若く、乳房もない。私たちの妹に縁談のある日には、彼女のために何をしてあげよう。8:9 もし、彼女が城壁だったら、その上に銀の胸壁を建てよう。彼女が戸であつたら、杉の板で囲もう。8:10 私は城壁、私の乳房はやぐらのよう。それで、私はあの方の目には平安をもたらす者のようになりました。

これは兄たちの言葉です。胸について書いていますが、これはまだ幼い少女であった時から、彼らが彼女を守っていたということです。そしてシュラムの女も、自分はソロモンのためにこの胸が守られていたのだと言っています。それで初めて、ソロモンにとって平安をもたらすものであったということです。つまり、彼女が処女であったこと、ソロモンの妻になることができたのは、兄たちのおかげだということです。

8:11 ソロモンにはバアル・ハモンにぶどう畑があつた。彼はぶどう畑を、守る者に任せ、おのおのその収穫によって銀千枚を納めることになっていた。8:12 私が持っているぶどう畑が私の前にある。ソロモンよ。あなたには銀千枚、その実を守る者には銀二百枚。

これは、ソロモンに実際にあつたぶどう畑のことを初めに話しています。そこで自分の畑を守ったものに、これだけの報酬を与えました。そして、次の 12 節のぶどう畑は、シュラムの女本人です。彼女を守っていた兄に対して、ソロモンが結納金として払ってくださいということです。それだけのことを兄たちはしてくれたのだ、ということです。

8:13 庭の中に住む仲間たちは、あなたの声に耳を傾けている。私にそれを聞かせよ。8:14 私の愛する方よ。急いでください。香料の山々の上のかもしかや、若い鹿のようになってください。

ソロモンが彼女に「私にその声を聞かせよ。」と言っています。それはここにいる兄たちにも、聞こえるようにしなさいと言っています。そうです、家族の中で公にしています。そして彼女は、まだ結婚していない時に、ソロモンが戻ってきてほしいと待ち遠しく待っていた時の声を上げています。そうです、初めの愛を二人はまだ保っていました。私たちはイエス様と初めの愛を保っていますか？「黙示 22:17,20 聖霊と花嫁も言う。『来てください。』『これらのことをあかしめる方がこう言われる。『しかり。わたしはすぐに来る。』アーメン。主イエスよ、来てください。』」